

珍嵩の『孔目章記』逸文に対する研究

崔鉉植(ソウル大学校講師)

1. 珍嵩の『孔目章記』

韓国僧侶の著作の中には後世、韓国には伝存せず、日本にのみ伝わった著作が少なくない。その中には元曉や憬興といった新羅時代の僧侶の著述のほか、知訥のように高麗時代の僧侶の著述もある¹。これは韓国と日本の仏教交流の緊密さを物語るものであり、韓国古代の仏教文献があまり残存しない現在において日本に伝わった仏教文献は、韓国の仏教はもちろん古代東アジアの仏教思想を理解する上にその資料的価値は計り知れない。こうした中、惜しまれることに日本に伝わった韓国仏教文献の中には、書名だけが伝わり実際の書籍は散逸した場合が少なくない。しかし、幸いなことに最近、韓国と日本の両国の学者の努力により、後代日本の仏教文献所引の資料からこのような逸失した諸文献の逸文を収集し、その内容を復元する試みが継続して行われている。本論文で扱う珍嵩撰の『孔目章記』も書名のみ伝わる新羅仏教文献の一つで、従来その実体は全く知られなかった。しかし、近年筆者は日本に伝存する仏教文献のなかでこの書物の逸文と考えられる資料を発見した。そこで本稿ではその内容について吟味・検討していきたい。

珍嵩の『孔目章記』は、現存する韓国の仏教資料にはその痕跡が見えないが、日本の仏教文献目録には早くからその存在が確認されている。日本の現存最古の仏教文献目録である円超撰『華嚴宗章疏并因明録』(914年)と永超撰

¹ 知訥の『華嚴論節要』は韓国では忘れられたものであるが、日本の金沢文庫に所蔵された筆写本を金知見先生が1963年に校註・影印して紹介し広く知られるようになった。『華嚴論節要』の日本での受容および流通過程について12-13世紀の韓日仏教交流と関連してより詳細に検討する必要がある。この点については今後の課題としたい。

『東域伝灯目録』(1094年)に「新羅珍嵩」の著述として『孔目章記』六巻が記載されており²、凝然(1240-1321)撰『華嚴宗經論章疏目録』には珍嵩の著作として『一乘法界図記』一卷が収録されている³。また、9世紀中半の著述とされる増春の『華嚴一乘義私記』には正確な書名は不詳であるものの「新羅珍嵩記」が引用され⁴、さらに鎌倉時代末期から南北朝時代の僧侶杲宝(1306-62)が編纂した『宝冊鈔』には「青丘釈珍嵩」の著述である『探玄記私記』が引用されている⁵。以上、珍嵩には少なくとも三種類の著述が存在したことがわかり、その書名から、彼が義相以後の新羅華嚴学の僧侶であること、義相をはじめとして智儼と法蔵の著述に註釈を施した人物であることがわかる。しかし、現状では引用状況から彼が10世紀初以前に活躍したことが推定されるだけであり、活動時期や師承関係、思想的傾向などについてはよく知られていない。

このように珍嵩に関しては彼の著述の名前だけが知られているが、平安時代初期の仏教文献に引用されている新羅出身の僧侶が作った『孔目章』注釈書はほかならぬ珍嵩の『孔目章記』であり、したがって珍嵩の思想内容を窺がえる資料として注目される。珍嵩あるいは『孔目章記』という名前は見えないが、韓国はもちろん日本に珍嵩以外の新羅出身の僧侶が『孔目章』に対する註釈を施した事実が知られていないことから、この資料は珍嵩の『孔目章記』の逸文である可能性が高いためである。そこで以下では具体的にこの資料が珍嵩の『孔目章記』の逸文である可能性を検討し、またこの資料の内容を紹介したい。

² 大正蔵55、1134a、1147a。

³ 日仏全1、250。

⁴ 大正蔵72、32c。

⁵ 杲宝『宝冊鈔』巻8(大正蔵77、826b)「探玄記第三私記(青丘釈珍嵩撰)云馬鳴起信論一卷依漸利經二卷造此論而道跡師目録中云此經是偽經故依此經造起信論是偽論也」この記録に出る〈道跡師目録〉は占察經(漸利經)を疑偽經と収録する道宣の『大唐内典録』(巻九、歷代所出疑偽經論録第八、大正蔵55、335c)を指すと考えられる。望月信亨『仏教經典成立史論』(法蔵館、1946年)はこの『宝冊鈔』の内容を引用しながら該当部分を「道宣師目録」と記している。彼が見た『宝冊鈔』の内容が大正蔵と異なっていた可能性がある。

2. 『孔目章記』逸文としての『新羅記』・『青丘記』

1) 『孔目章』注釈書としての『新羅記』と『青丘記』

新羅人による『孔目章』の注釈書と考えられる資料を引用しているのは、平安時代初期の華嚴宗文献と考えられる『華嚴一乘成仏妙義』(以下『成仏妙義』)と『華嚴十玄義私記』(以下『十玄私記』)である。前者は新羅出身僧侶である見登が日本で著述した文献で、華嚴宗の成仏理論を智儼、義相(湘)、法蔵などの著述に依ってまとめた書物であり⁶、後者は著者未詳で、法蔵の『五教章』義理分齊の中の「十玄無碍義」に対する注釈書である⁷。二つの書物はいずれも『孔目章』の文章を説明する際に『新羅記』と『青丘記』という書物を引用している(引用文は後掲の引用資料を参照されたい)。

これらの書物では『新羅記』と『青丘記』という別々の名称を使用しているの、それらはそれぞれ別個の書物と考えられる。しかし「新羅」沙門を「青丘」沙門と表現するように、青丘は新羅の別称として広く使用されるので、二つの書物の名称は同一書を指したものと見なければならぬだろう。この推測は二書の具体的な引用形式からも裏付けられる。『成仏妙義』には、最初の引用箇所では『青丘記』と『新羅記』とするが、それ以後は全て「記」となっている。もし『青丘記』と『新羅記』が別途の書物であれば後半で単純に「記」と表現するのではなく、『青丘記』と『新羅記』の中、どちらの書物を指すのかは明示したはずであろう。それ故、これらの二書は同一書とみなしてよさそう。

『新羅記』あるいは『青丘記』が『孔目章』の注釈書であることは引用内容から容易にわかる。それは、後掲の逸文資料に見えるように、『成仏妙義』ではまず『孔目章』の文章を提示した後、その内容に対する説明として『新羅記』あるいは『青丘記』の文章を引用しているが、それらの大部分は『孔目章』の該当箇所に見える用語や概念に対する説明であるからである。また、この書物に「此

⁶ 崔鉉植(2001) 新羅見登의 著述과 思想傾向, 『韓国史研究』105, ソウル。

⁷ 『華嚴十玄義私記』はこれまで紹介されていない書物であり、現在、竜谷大学図書館と身延山大学図書館とにそれぞれ1種類の筆写本が所蔵されていることが確認されている。二つの筆写本は、すべて上下2冊からなり、若干の文字の差異はあるものの同じ系統の底本を筆写したものと考えられる。竜谷大学本には筆写年代が記録されていないが、本来、坂本幸男所蔵本であった身延山大学本には1817年(文化丁丑)に筆写したとの筆写記が記録されている。

章」[資料(10)・(19)]と言及されている文献はその内容から『孔目章』であることがわかり、『孔目章』に引用されている『大乘同性経』と『修時章』がどの經典であるのかに関する説明もある[資料(19)]ので、この『新羅記』あるいは『青丘記』という書物が『孔目章』の注釈書であることは疑問の余地がないであろう。一方、『十玄私記』では、『成仏妙義』のように『孔目章』の文章に続けて『新羅記』あるいは『青丘記』の文章を引用する形態ではないが、引用内容から『孔目章』の注釈書であることがわかる。後掲の資料に見るように、三つの文章の引用文はすべて『孔目章』の解釈と関連して著述されている⁸。

2) 『孔目章記』と『新羅記』・『青丘記』

以上のように『成仏妙義』と『十玄私記』に引用される『新羅記』あるいは『青丘記』が『孔目章』に対する注釈書であることが判明した。しかし、この書物がいつ、だれによって著作されたかという点については『成仏妙義』と『十玄私記』はもちろん、他の資料にも全く言及されていない。従来『新羅記』あるいは『青丘記』の性格に言及したのは高翊晋氏が唯一である。高翊晋氏は『新羅記』を元暁の『華嚴経疏』に、『青丘記』を太賢の『華嚴経古迹記』に推定している⁹。ところが、『新羅記』と『青丘記』とが同一の書物であり、かつ『孔目章』に対する注釈書という点を考慮すると、この推定は妥当とは言えず、これは以下の点から見て珍嵩の『孔目章記』と同一の書物と考えられる¹⁰。

その最大の理由は、新羅人の著述で『孔目章』の注釈書は珍嵩の著述以外に知られないことである。もちろん新羅の仏教文献は現存するものが極めて少なく、またどのような書物が存在していたのかという点についても判然としなため、珍嵩以外にも別の『孔目章』の注釈書が存在した可能性を完全に排除

⁸ 平安時代の著述と考えられる著者未詳の『成唯識論本文抄』にも『新羅記』という名前の文献が引用されているが(大正蔵65、788c)、この文献は内容から『成唯識論』に対する注釈書であり、ここで扱う『孔目章記』とは別個の書物である。この書物もやはり新羅僧侶の著述という点で『新羅記』に言及されたと考えられる。

⁹ 高翊晋(1989)『韓国古代仏教思想史』、東国大出版部、pp.359-361。

¹⁰ なお、身延山大学本『十玄私記』の表紙の裏面には、『新羅記』と『青丘記』をそれぞれ元暁の『五教記』と『涅槃経宗要』に推定しながら、その根拠として『五教章通路記』の「海東記者新羅先徳作五教記」という一文と親門『華嚴種性義抄』において元暁(『涅槃経宗要』)を「青丘元暁大師」と記すのを引用した短い注記がある。この注記はこの書物の所蔵者であった坂本幸男が記録したものと考えられるが、これもやはり新羅と青丘という表現に注目したものであり、その内容を十分に検証したものではない。

することはできない。

しかし、少なくとも日本にまで伝来し日本僧侶の著述所引の『孔目章』注釈書としては珍嵩の『孔目章記』以外に想定することは難しい。なぜなら奈良時代の写経目録をはじめとして日本国内の仏教文献に関する記録の中で、珍嵩以外の人物が著わした『孔目章』に対する注釈書はいまだ発見されていないからである。仮に『成仏妙義』と『十玄私記』所引の書物が珍嵩の著述でないとすれば、『成仏妙義』と『十玄私記』の著者は珍嵩の書物との混同を避けるためにもその著述者を明確に示したはずである。

また、『新羅記』あるいは『青丘記』を珍嵩の『孔目章記』と推定できる他の根拠は、増春の『華嚴一乘義私記』に珍嵩の著述を「新羅珍嵩記」という名称で引用している点である。引用文の内容は、無尽義は同教ではなく別教の教えであるというが、なぜ無尽義を説く帝網無碍を『探玄記』では同教と説くのかとの質問に対して、「新羅珍嵩記」を引用し『探玄記』の同教は文字の錯誤であり、本来は円教が正しいと語る箇所である。[詳細な内容は後の資料(26)参照]

問爾何十重唯識章云帝網無碍故説唯識總具十重約同教説乎既帝網無碍唯
識約同教説云云何今云同教中不説無尽義答新羅珍嵩記云同字謬也可作円字
云云意可云約円教説不可云約同教説云也

この「新羅珍嵩記」が珍嵩のどの著述を指すのかは明確ではない。ただ、「新羅珍嵩記」の引用内容が『探玄記』本文に関するものであることと、珍嵩が『探玄記私記』を著述したことから、これは珍嵩の『探玄記私記』である可能性がたかい。しかし、「新羅珍嵩記」は議論の過程で『孔目章』を引用しており、また『孔目章』にも同教と別教との違いが議論されることから、これが『孔目章記』の可能性もある。いずれにしても重要なことは珍嵩の書物を「新羅珍嵩記」と呼称しているということであり、「新羅珍嵩記」は『新羅記』と相通ずる名前である。「新羅珍嵩記」から珍嵩という人名を除外すれば、まさに『新羅記』となり、「新羅珍嵩記」が珍嵩の『新羅記』であると見て大きい過ちはないであろう。

なお、珍嵩は「青丘釈珍嵩」とも呼ばれていることから¹¹、彼の著述を『青丘

記』とすることについても何の問題もないであろう。

3. 『孔目章記』逸文の内容と特徴

1) 逸文の内容

珍嵩の『孔目章記』と推定される『新羅記』、あるいは『青丘記』を最も多く引用している文献は見登の『成仏妙義』で、そこには22箇所引用されている。元来、『孔目章記』が註釈する『孔目章』の該当部分と『成仏妙義』での引用状況を対応させたのが後掲資料(1)-(22)である。この資料に見えるように、五つの部分から構成された『成仏妙義』のうち、『孔目章記』の引用は第二の弁定得入門と第三の顕教差別門、そして第四の疾得成仏種類門などにみえる。そのうち、弁定得入門と疾得成仏種類門はそれぞれ1回の引用に止まるが、顕教差別門では20回にわたり引用されており、その引用された分量も相当である。顕教差別門は本来、『孔目章』巻三の「初明十地品十地章」の内容を引用し、それを説明する体裁となっているが¹¹、実際は説明の半分以上が『孔目章記』の引用となっている。このため少なくとも『孔目章』の「初明十地品十地章」に関する限り、『孔目章記』の内容を相当部分復元することができるのである[(3)-(7)、(10)-(22)]。ただ、顕教差別門所引のもののうち、小乗において成仏する時までには要する劫の単位を説明する部分[(8)・(9)]だけは『孔目章』巻四の「阿僧祇品時劫章」への註釈である。なお、弁定得入門と疾得成仏種類門で引用する『孔目章記』の内容は『孔目章』巻四の「釈四十五知識文中意章」への註釈である[(1)・(2)]。

『十玄私記』には『孔目章記』の内容を3箇所引用しているが、その内容から『孔目章』巻一の「天王讚仏説偈初首顕教分齊義」に対する註釈部分と考えられる。これらを『孔目章』の該当する部分とともに整理したのが資料(23)-(25)である。相当な分量の『孔目章記』の内容を本来の文章そのまま引用する『成仏妙義』と比べると、『十玄私記』での引用はあまりに少ない量に止まり、それさ

¹¹ 前註5)の『宝冊鈔』引用文を参照。

¹² 韓仏全3、729b「依孔目第三顕六教差別」。

えも本来の文章のまま正確に引用したのではなく、主たる論旨のみに縮約し紹介するに止まっている。しかし、『成仏妙義』所引の逸文が後代の華嚴関係の文献で言及されないのとは異なり、『十玄私記』所引の内容は、以後も継続して日本の華嚴学界で言及されることが注目される(詳細は後述する)。これは『成仏妙義』よりも『十玄私記』が、より広く読まれていたためではないかと考えられる¹³。

なお、前に言及したように、『一乗義私記』にも「新羅珍嵩記」の内容が引用されているが、この部分は内容から珍嵩の『探玄記私記』である可能性が高い。ただ『孔目章記』である可能性を完全に否定することはできないために一緒に整理した[資料(26)]。

続いて以上の逸文の内容を簡略に整理してみよう[(26)に対しては前に内容を紹介したため省略する]。まず『成仏妙義』所引の逸文を見ると、(1)と(2)は、長い修行を経ずに直ちに成仏する疾得成仏に対する説明である。『孔目章』ではこれを一生成仏、見聞成仏、一時成仏、一念成仏、無念成仏などに区分しているが、(1)と(2)はそれぞれ一生成仏と無念成仏に対する補充説明である。

(1)では、一生成仏の具体的な事例として『孔目章』に説かれる普莊嚴童子、兜率天子、善財童子、竜女などが一生に成仏する理由を説明しており、(2)では華嚴で説かれる無念成仏が『維摩経』の無念すなわち「一念不生即是仏」とは他のものであると説いている。

(3)から(22)までは、『孔目章』で華嚴の教判にしたがって、各段階の教学ごとに成仏に関する理論に違いがあることを説明する部分に対する補充説明である。(3)-(5)は、人天乗に対するものであり、仏が人天にあらわれる姿に対する『孔目章』の言及を、より詳細に敷衍し説明している。

(6)-(9)は、小乗(二乗)の成仏理論に関する説明であるが、(6)と(7)は成仏に至る段階に対するものであり、(8)と(9)とは成仏に至る時間について劫を単位として説明している。

(10)-(12)は、大乘初教の廻心教門での成仏理論に関する説明である。(10)は

¹³ このような後代の引用を通して現伝する『十玄私記』写本の誤字を訂正することもできる。

成仏に至る修行の段階である十地がどのような意味をもって設定されたのかを地論宗文献の『法鏡論』を引用して説明し、つづいて同じ智儼の著述である『五十要問答』と『孔目章』において、十地を説明する内容が異なることに対して問題を提起した後、それに対して慧鏡徳の説明を引用し解明している。ここではまた一乗の教えを理解できない菩薩、すなわち仮名菩薩に対して智儼と法蔵の説明の仕方が異なる理由に対しても『法鏡論』にあらわれた地論教学の教理に対する理解の違いとして解明している。なお、この仮名菩薩の問題は新羅華嚴学において議論の対象となった問題であり、この『孔目章記』の言及は仮名菩薩の問題を理解するにあたり重要な示唆となる¹⁴。(11)は、廻心教での無分別空理に対する言及であるが、廻心教の空は、依他法を認定する仮相の空理であるため真如理ではないと説いている。(12)は廻心教での仏身に対する説明である。

(13)は大乗初教の直進教門での成仏の位階に対する説明であり、『孔目章』の内容が『本業經』に拠るものであることが説かれている。

(14)-(19)は、大乗終教での成仏の段階に対する説明である。(14)は、『梵網經』では第十地で成仏すると説く『孔目章』の内容について、具体的に『梵網經』のどの部分に依拠したのかを明らかにする。(15)-(17)は、八地以上で成仏するという理論を敷衍しつつ、それが『十地論』と『起信論』によるものであると説く。(18)は七種生死を超越してこそ成仏の境地に入るという理論に対して、三種の分段生死と四種の変易生死の内容、およびそれぞれの生死と十地の各段階との対応関係に対して、『仏性論』、『仏地論』、『梁摂論』、『勝鬘經』、真諦の『勝鬘經疏』、義相の『法界図』、慧遠の『大乘義章』などを引用しながら具体的に説明する。(19)は、『孔目章』の中で、十地の種類と内容に対する説明を『大乘同性經』と『梁摂論』「修時章」を引用する部分について「修時章」の該当部分を直接引用して提示し、この内容に対する慧鏡徳の解釈を併せて引用している。

(20)-(22)は、一乗での成仏の段階に対する説明であり、一乗の成仏理論の根拠とされる『華嚴經』の文章を提示し[(20)]、そのような一乗の成仏理論が増

¹⁴ 金天鶴(2001) 新羅華嚴における三乗極果廻心説の流れ、『印度学仏教学研究』99。

上慢をなくす理由を説いている[(21)]。そして一乗の理論である六相を縁起陀羅尼法と呼んでいる[(22)]¹⁵。

次に、『十玄私記』所引の逸文の内容を検討する。

(23)は、『孔目章』で円教を「見聞処」と「円教処」とに区分するのに対して、具体的に両者が何を指すのかに対する議論の中に引用されるが、『十玄私記』の著者によれば、『新羅記』すなわち『孔目章記』において「見聞処」は「円教の中の同教」、「円教処」は「円教当体」とに区分されるという。『十玄私記』によれば、この問題と関連して『孔目章記』の解釈以外に「見聞処」を「円教の中の別教」、「円教処」を「円教の中の同教」と区分する立場と、「見聞処」を(見聞一解行一証入)の三生の中の「見聞生」、「円教処」を「解行」と「証果海生」とに区分する立場などがあったが、『十玄私記』の著者はこの中で、『孔目章記』の解釈が『孔目章』の内容に一致するものと評価している。

(24)は『孔目章』巻一の「天王讃仏説偈初首顕教分齊義」の中で、『華嚴經』に出る天王の讃偈が五教判の經典的な根拠であると説くのに対して、その天王の讃偈とは具体的にどの偈頌を指すのかに対する議論である。一般的に妙淡海一天王の讃偈である「如来音声無碍碍堪受化者靡不聞等云云」だと言われているのとは異なり、『青丘記』すなわち『孔目章記』では善光海大自在天王の讃偈である「無尽平等妙法界悉皆満如来身云云」と説明している。この部分は『孔目章記』の逸文のうち、後代の日本仏教界でも引用されている唯一の部分であり、12世紀の尊玄の『孔目章問答』(1190-1195編纂)と13世紀凝然の『孔目章発悟記』などに引用されている¹⁶。

(25)は『楞伽經』に説かれる四種の言説(相言説、夢言説、計着過惡言説、無始妄相言説)と『孔目章』巻1<天王讃仏説偈初首顕教分齊義>に説かれる五教それぞれの言説方式との対応関係に関する議論である。すなわち、小乗

¹⁵ 頓教に対する部分は引用されていないが、本来『孔目章記』に存在しなかったかあるいは『成仏妙義』の著者が引用しなかったのかは不明である。

¹⁶ 日仏全7、p.2、p.264。これらの書物での『青丘記』の引用は高峯了州(1964)『華嚴孔目章解説』、南都仏教研究会、p.9に指摘されている。ところで、『孔目章問答』と『孔目章発悟記』には該当内容をそれぞれ「私記」と『古徳五教私記』から引用していると説いているが、引用された内容はすべて『華嚴十玄義私記』と一致している。全体的な引用の内容から見ると、尊玄や凝然が直接『孔目章記』を見て引用したのではなく『十玄私記』に依拠して引用したと見られる。

の「有名之教詮有名之義」を相言説、大乘初教の「有名之教詮有名之義、有名之教詮無名之義」を夢言説、大乘熟教の「有名之教目有名之義、有名之教目無名之義、無名之教目無名之義」と頓教の「無名之教頭無名之義」、円教の「有名之教頭有名之義、有名之教頭無名之義、無名之教頭無名之義」を無始妄相言説に対応させ、計着過惡言説は外道の言説であり、仏教の理論に該当しないと述べている。

2) 逸文にあらわれた特徴

以上、『孔目章記』逸文の内容を検討してきたが、これらの逸文は『孔目章記』全体のごく一部に過ぎないといえる。しかし、これだけからもいくつか『孔目章記』の特徴を窺うことができる。

まず注目されるのは、この逸文には他には見えない資料が引用されている点である。経と論を除外した引用資料は、法標の『法鏡論』¹⁷と義相の『法界図』、智儼の『五十要問答』、法蔵の『探玄記』、慧遠の『大乘義章』、そして慧鏡徳の発言などであり、この中、『法鏡論』の引用文と慧鏡徳の発言は他の文献にはあらわれていない。

『法鏡論』は表員の『華嚴經文義要決問答』にも引用されている¹⁸。また、均如の『三宝章円通記』¹⁹と日本の文献である寿霊の『五教章指事』²⁰には書名は挙げず、「懷公云」や「懷師云」の形式で一部が引用されている。ただし『孔目章記』所引の内容はこれらの書物の引用とは重複していない。『法鏡論』を引用している文献が、新羅華嚴学およびその影響を受けた奈良華嚴学の文献であるという点から、新羅華嚴学に及ぼした『法鏡論』の影響は特別に注目する必要があると考えられる。『孔目章記』(資料(10))には『法鏡論』の思想的立場を伝える内容を比較的詳細に引用しており、智儼が『法鏡論』をどのように理解し

¹⁷ 『法鏡論』の著者を『孔目章記』に引用されている『成仏妙義』は法標師としているが、他の文献では懷師あるいは懷公となっており、本来、法標であった可能性が高い。法標に関しては不明な部分が多いが、おおそ6世紀後半に活躍した地論宗南道派の人物と推定されている。[石井公成(1996)『華嚴思想の研究』、春秋社 p.175-178 参照]。

¹⁸ 韓仏全2、355c・360c・361a-b・368a・368c・369a・371b・372c・380c・394c-395a。

¹⁹ 韓仏全4、161b。

²⁰ 大正蔵72、254c。

ようとしたのかを言及しているため、当時の新羅の華嚴学界に既存の地論教学と智儼の教学をして理解しようとした試みが、どのような形態で行われていたかを知る上で貴重な資料といえよう。

慧鏡徳は義天の『新編諸宗教蔵総録』に『起信論記』三巻の著者と記録される人物であり²¹、「～徳」という称号から新羅の僧侶と考えられる²²。彼の活動時期や思想系譜などは全く不明であるが、『孔目章記』の引用文の思想内容や『新編諸宗教蔵総録』の起信論注釈書のリストでの配列の順序などから推して、ほぼ義相と同様の時期に活動したと推定される²³。

なお、著述は残存せず他資料への引用も見えないため、『孔目章記』での引用は慧鏡の姿を窺わせる唯一の資料として重要である。また、慧鏡の言葉を2回引用しながら2回ともに議論の結論に採用することから、『孔目章記』の著者が慧鏡の見解を重要視していたことがわかる。

次に義相の『法界図』の引用も注目される。珍嵩が『法界図』の注釈書である『法界図記』を著述したことから、彼は義相系の華嚴学を継承した人物であった可能性が高い。とりわけ義相を「相徳」としていることから[資料(18)]、義相に対する尊敬と親密さを窺わせる。ただ、現存する義相系の文献である『法界図記叢髓録』や、均如の著述には珍嵩に対する言及が全く見えておらず、彼が後代の義相系と直接連結されるようなものではないようである。その要因としては、彼の著述がはやく失われたために後代に継承されなかったか、あるいは彼の思想が後代の義相系の主流的な位置を占めた神琳一法融などとは他の傾向を帯びていたためである可能性が考えられる。

珍嵩が義相系の華嚴学を継承した可能性がある点と関連して、彼が『起信論』について偽經に基づいた偽論であると語っている点が注目される。前述したように杲宝が編纂した『宝冊鈔』には珍嵩の『探玄記私記』を引用しているが、そこには、『起信論』は漸刹經(=占察經)に基づいて著述されたが、漸刹經自体が偽經とされるから『起信論』も偽論であるとしている²⁴。一方、義相系

²¹ 韓仏全4、692b。

²² 石井公成、前掲書 p.72、註15) 参照。

²³ 石井公成、前掲書 p.178 参照。

²⁴ 前註5)の引用文を参照。

文献では『起信論』がほとんど引用されず、むしろ議論の中で『起信論』的な思想を批判する内容が見えることから、義相系では『起信論』を批判したという見解が提示されている²⁵。しかし、杲宝の引用の内容が事実ならば珍嵩の発言は義相系の『起信論』に対する立場を端的にあらわすものとしてひとまず理解されるであろう。

ところが、『孔目章記』が重要視する慧鏡徳に『起信論記』の著述があり、『孔目章記』自体も『起信論』を引用することから[資料(17)]、珍嵩が『起信論』を偽論と考えたと断定するのは難しい。引用された『探玄記私記』の内容は珍嵩自身の意見というよりも、そのような見解が新羅に存在したことを提示した部分であり、杲宝がその部分だけを引用したことから、あたかも珍嵩がそのような意見を持っていたと誤解されたのではないかと考えられる。

なお、『孔目章記』の逸文かどうか明確ではないが、資料(26)で、珍嵩が帝網無碍を同教と言う『探玄記』の記述を誤まりだと指摘していることも、同教一別教の教判と関連して思想的に注目される。極めて断片的な内容であり、断定するのは困難であるが、无尽義は別教の教えであり、同教ではないという点を立証する決定的な論拠として、珍嵩の著述が引用された点を考慮すると、珍嵩もやはり同教を円教の反映あるいは方便として、円教自体である別教とは異なる教えとみなす教判的な認識を持っていたと推定される。

4. 『孔目章記』の著述時期と日本への流入状況

これまで『孔目章記』の逸文を整理し、その内容を検討してきた。最後に『孔目章記』の著述時期と日本への伝来の状況に対して考えてみたい。現存資料から明らかになる『孔目章記』著述時期の上限と下限は、それぞれ700年頃と914年である。それは『孔目章記』に引用される文献の中、法蔵の『探玄記』が新羅に受容された時期が700年頃であり、『孔目章記』を記載する『華嚴宗章疏并因明録』の編纂年代が914年であるためである。ただ、700年から914年までの時期は、新羅に華嚴学が紹介されてから新羅が滅亡する時期までのほとん

どの時期を包括するものであるため、意味のある推定とは言い難い。ごく一部の逸文しか残っていないために断定することは難しいが、引用文献が地論師と智儼、義相、法蔵などの初期華嚴学者たちにとどまることや、議論の内容が後代の文献には見えない独特な内容であることなどから、比較的初期の新羅華嚴学の文献の一つとして、800年以前に著述されたものではないかと考えられる²⁶。

華嚴学の重要な文献である『孔目章記』に対する最も早い時期の注釈書であることから重要な意味を持つにもかかわらず、『孔目章記』は前述した如く後代にあまり広く流通しなかったようである。韓国では全く言及されず、日本でも引用や言及は極めて限られている。日本でこの書物の存在が確認されるのは914年に編纂された『華嚴宗章疏并因明録』が最も早いですが、これは同書が当時の日本に存在したことを窺わせるのみであり、実際に日本に紹介されたのは、それ以前と思われる。現在の資料には、この書物が日本に紹介された時期や背景について言及されていないが、以下の状況から『孔目章記』は『成仏妙義』の著者によって日本に将来されたものであり、その時期は800年から900年の間であると推定される。

『成仏妙義』の著者である見登は、日本で活躍した新羅出身の人物と考えられ、『成仏妙義』には、当時の日本の華嚴学の文献には見えない義相系華嚴学の影響が強く現れている²⁷。義相系の華嚴学の文献は、800年頃までは日本に紹介された痕跡がなく、900年を前後する時期の文献に突如散見されるようになる。その背景には新羅で義相系華嚴学を学び、日本にそれを伝えた人物が想定されるが、状況からみて見登がまさにその人物である可能性が高い。事実、彼は『成仏妙義』の中に本来義相の門下たちが義相の講義を記録した書物である『華嚴経問答』を、あたかも法蔵の著述のように『香象問答』という書名で引用しているが、これは彼が『華嚴経問答』を最初に日本に紹介した人物であったために可能な表現と考えられる。『孔目章記』もやはり義相系の華嚴学と関連した著述と考えられ、800年頃まで日本に伝えられていなかったが、『華

²⁵ 佐藤厚(2000) 義相系華嚴学派の基本思想と《大乘起信論》批判—義相と元曉の対論記事の背にあるもの、『東洋学研究』37, 東洋大東洋学研究所。

²⁶ 金天鶴は新羅華嚴学での三乗極果廻心説の変化過程に照らして『成仏妙義』所引の『新羅記』を8世紀初期から中期の間のものと見ている(金天鶴、前掲論文 p.271)。

²⁷ 崔松植、前掲論文 参照。

『華嚴經問答』と同様の時期に突如登場することから『華嚴經問答』の将来者と同一人物、すなわち見登によって日本に紹介されたと考えられる。

『成仏妙義』の著述時期についても明確ではないが、この書物に800年頃の著述と見られる寿霊の『五教章指事』が引用されていることから、それ以降の著述と考えられ、前に推定したように見登が『華嚴經問答』と『孔目章記』とを日本に将来したとするならば、その時期は二つの書物が日本に存在することが確認される914年よりは早い時期となるであろう。

珍嵩の『孔目章記』逸文資料

- ①『孔目章』との対応が明らかなものについては、最初に註釈対象となる『孔目章』の箇所を<二字下げ>で掲げ、中でも『孔目章記』が注釈対象している部分には下線を付した。
- ② 誤字と考えられる文字は該当文字の後に(正字?)と表示した。正字が不明の場合には 該当文字の後に(?)と表示した。
例) 如(知?)仏是聖、藏師義中耳(?)極鈍根人
- ③ 誤った添加や重複した文字は[削除]の形態で表示した。
例) 即[学]成其仏
- ④ 内容上、追加しなければならない文字は<追加>の形態で表示した。
例) 即成<其仏>
- ⑤ 細註は(細註)と表示した。

1. 『華嚴一乘成仏妙義』での引用

『孔目章』巻四「釈四十五知識文中意章」

又依弥勒文 諸仏菩薩無量劫修 善財一生皆得者 依華嚴經疾得成仏 有其五種 一依勝身一生即得 從見聞位後一生至離垢定後身即成仏 二依見聞逕生疾剋 三依一時疾得成仏 四依一念疾得成仏 五依無念疾得成仏 初義有四 一依世界性等 十世界身輪王之子 現身成仏 如普莊嚴童子等 二者依天子勝身 從三惡道出 生兜率天 現身成仏 三者依閻浮提勝功德身 如善財等現身 究竟普賢之行 後生即見仏 四者依法華經竜女之身 南方成仏 義当留惑之身 疾得成仏 二依見聞逕生疾剋者 如初地中説 有三時益 一聞時益 二修行時益 三轉生時益 故地論云 是諸如来 加護於諸菩薩 此人能聞持如是微妙法 此是聞時益 諸地淨無垢 漸次而滿足 証仏十種力 成無上菩提 此是修行時益 雖在於大海及劫尽火中 決定信無疑 必得聞此經 此是轉生時益 三依一時疾得成仏者 如善財童子於知識處一時之間獲普賢法 四依一念疾得成仏者 如契普賢法一念即成仏 此依俗諦念也 五無念疾得成仏者 一切法不生 一切

法不滅 若能如是解 是人見真仏故

(成仏妙義/ 第二弁定得入門の中)

(1) 後明疾成仏類 総有四人 一依世界性等十世界身 輪王子現身成仏 如普莊嚴童子等 二者依天子身勝 從三惡道出兜率天現身成仏 三者依閻浮提勝功德身 如善財等現身究竟普賢之行後生即見仏 四者依法華經 竜女之身南方成仏義 當留惑之身疾得成仏(孔目第四文也)

青丘記云 十現身成仏等者 問 普莊嚴童子逕二仏世界塵數劫修成仏 何故一生成仏 答 此人分段身即成仏故一生成仏 問 以何文為証 答 藏師云 一約位十信約心勝進分後入十解即成仏果等 解云 十信終心即成仏等 故知一生成仏 兜率天子現身成仏者 此人過去由聞經故隨(墜?)三惡道 而以彼善根身承小相光明從地獄出生兜率天 此天身是解行身 此身即成仏故一生成仏 又善財童子一生逕知識遇 即成仏也 竜女之身南方成仏者 此人亦依華嚴教則留惑得竜女身 即是身成仏故云一生成仏 (成仏妙義/ 第四疾得成仏種類門の中)

(2) 五無念疾得成仏者 一切法不生 一切法不滅 若能如是解 是人見真仏故

記云 有云 約維摩一念不生即是仏 此義不然 同是俗諦念即是無生 故云無念成仏

『孔目章』卷三「初明十地品十地章」

就初入天 有三種成仏 一仏為救三惡道現身 異彼三惡道外 即成仏身 如仏現黑象脚等 二為引人趣 現在仏身 如仏為提謂長者現樹神身等 三為引人天為現其聖身 如人天等知仏是聖 而興供養成世間福者是 二就二乘中有其七義 一約地 謂三界九地十地十一地等外 即成其仏 二約位 見修已外 即成其仏 三者約行 離學已外無學身中 即現成仏 四約菩薩行 三十三心外 即成其仏 五者約時 小乘六十劫成三僧祇外 即成其仏 六者約生死 最後分段身上即成其仏 七者依小乘十二住 第十二最上阿羅漢住則同是仏 三者約初迴心教門 有其八義 一約地位 謂乾慧地等十地 第十地中即成仏 所以同十地成仏者 為仏下同因位故作此說 二約三界九地十一地等已外 即成其仏 三約位

見修已外即成其仏 四約行 學位已外同無學羅漢位 即成其仏 五約時 依大乘三僧祇外即成其仏 六約菩薩行 三十三心外 即成其仏 七約無分別 空理一念即成其仏 八約生死 最後分段身上即成其仏 此約化身 若約報 分段身後即成其仏 又約初教直進位 有其七門 一約位 從十信位等 乃至從歡喜地等滿足十地已外 即成其仏 此由仏境界分段身 非同菩薩地分段身故 二復約位 從歡喜地盡第九地 於第十地 即不退成其仏 此亦為對聲聞下位 於下身中成仏故 故作此說 三約理 謂真如無分別空一念即成其仏 四約十地後一念証果 即成其仏 五約時 大乘三僧祇後即成其仏 六約行 究竟無學即成其仏 七約大乘十二住 於第十二最上菩薩住後 即成其仏 又約大乘終教 有其十門 一者約位 從十信行 乃至歡喜等十地滿後 即成其仏 二者從歡喜等初地 至盡第九地 於第十地中 即成其仏 如梵網經所說者是 此為對聲聞 現凡身上得於果証故作此說 此當變化成 非當実成 三者約位 從初歡喜地至第三地 是世間法相同三界 第四地已去至第七地 相同無流 於世間身中 得彼三乘無流德 名為出世 第八地已去至第十地 名出出世 即得成仏 第八地成法身 第九地成応身 第十地成化身 此為於十地中別地相故作是說 四者一念成仏 約無分別真如故作此說 第五約証以明一念成仏 於初地中一念証故 六於十地後一念証果 名一念成仏 上諸一念者 所謂無念也 七約時者 謂大乘三僧祇後即是仏 八約行 金剛心後 得一切智智即是仏 九約生死 滅七種生死後即是其仏 十者依大乘同性經 有三種十地 聲聞十地 緣覺十地 仏十地 為招引小乘 同於大乘終教之義故作此說 其十地名等 具如疏說 又有差別十地相広如梁本撰論修時章釈 第四約頓教明者 唯有一門 所謂無相 何以故 由成一行三昧故 乘彼一味真如所成故 不可說有諸異相門 成仏亦如此 一切俱離是名仏也 第五約一乘義者 十信終心 乃至十解位十行十迴向十地仏地 一切皆成仏 又在第十地 亦別成仏 如法寶周羅善知識中說 何以故 一乘之義 為引三乘及小乘等 同於下位及下身中 得成仏故 又於八地已上 即成其仏 如於此位成無碍仏一切身故 此揆別教言 若揆同教說 即撰前四乘所明道理 一切皆是一乘之義 文雖是同 而義皆別 如此等法差別相者 為護十地故 隨方便門作種種說 令諸衆生於十地中離增上慢 又依六相總別義即是一乘 隨相別布義即是三乘 此約教分說 其真一乘十地之法 盡其三世已通究竟 此揆証說

(『成仏妙義』第三顯教差別門の中に引用)

(3) 第一人天乘教 此有三成仏 一仏為救三惡道現身 異彼三惡道外 即成仏身 如仏現黑象脚等

新羅記云 仏現黑象脚身見地獄迦無碍行 故欣之植善根 約此義故云 一仏為救三惡道乃至即成仏身等也

(4) 二為引人趣現在仏身 如仏為提謂長者現樹神身等

記云 仏初成道其合河迦樹下示十六尺身及現相好具足身 諸商人等見此仏身為神之奉時善根人為引是人現成仏身也

(5) 三引人天為現其聖身等 如(知?)仏是聖而興供養成世間福者是

記云 仏在樹下時梵天知供養仏 而仏默然七日 更梵天請說法 故仏第二七日說法時多人種善根 故云 為引人天乃至如人等知仏是聖等也

(6) 第二二乘中有其七義

二約位 見修學已外即[學]成其仏

記云 仏在樹下六行等智通 而悲(非?)想地以還下三空煩惱俱伏 起見道無漏時前所伏修惑俱斷也 斷悲(非?)想地九品修惑之九無間九解脫斷見所斷煩惱証四諦理 為第十六心見道也 悲(非?)想地第八解脫以還俱為修道也 唯第九解脫為無學道也

(7) 四者約菩薩行 三十三心外即成其仏

記云 問 三十三心八忍八智九無間八解脫 前約位積時竟 何故更積耶 答 前約通一切人義明成仏也 此唯明釈迦菩薩成仏軌則 故更別積也(雖位心同明時義 位心既已開合不同 明此差別故別積也)問 若爾何故如是 答 菩薩唯是修三十三心 無修余成仏義 故此不共於余也 聲聞不定 謂次第人百七十八念中有成仏之人 而唯無出見修無學 故約見修通一切人也(今此孔目所說見修約菩薩說也)菩薩不爾 唯三十三心故 唯不共於余中也 問 次第人何故修百七十八念成仏 答 九地中一一地有九品煩惱具無間解脫 故得百六十二念 此中加八忍八智故有百七十八念 如是念攝於見修云何 答 見道攝八忍八智[故有百七十八念如是念攝於見修云何 答見道攝八忍八智]也 九九八十一品煩惱中斷第八十一品煩惱之解脫為無學道也 余皆攝於修道 故見修已外即成仏者並通一切中也

(8) 五者約時 小乘六十劫成三僧祇外即成<其仏> 孔目四云 小乘以六十劫為大劫阿僧祇 小乘經此三僧祇得作仏²⁸ [其仏]

記云 小乘中阿僧祇有六十劫中約第五十二劫 故唯是一劫為阿僧祇也 此於八十小劫中除空劫二十云六十劫也 此六十劫中第五十三小劫為阿僧祇也 六十四劫中一劫者是半劫 故總八十小劫為一劫也 總六十四劫為一劫者 是大劫更可學

(9) 生身者但百劫修相好業 於最後身伽耶城淨飯王家受生報身 於摩伽陀國而登覺道

記云 問 三僧祇劫中修有漏四波羅蜜時 在何身修耶 答 未發見道無漏以前 皆有凡夫身具事也 過去時三僧祇劫中 修有漏四波羅蜜 次百劫中修別報相好業 次生兜率天中 千劫學仏威儀 然後生王宮中 摩耶夫人為母 次成太子以我藍伽藍外道為師習正定 次座於樹下 寅時以六行等智道 而三界中無所有處以還修惑俱伏 起見道無流時前所伏煩惱俱斷 不得初三果 越得第三那含果耶同時斷*悲想地九品修惑得阿羅果 寅時即得成道 同(問?)六行等智道何故不伏見所斷惑 答 欣上厭下 緣世俗事之道故不伏障諦之見所斷煩惱 顯覺道方便得伏見所斷煩惱 又欣勝厭劣 道謂生死是劣 亦道勝於此之有理緣此理時 伏見道障煩惱 同(問?)見道無漏者依何位起 答 若起真見道者 小乘大乘並依第四迦際定起也 若起相見道者 地持論云 三依五生 所言三者智諦現觀(正諦智) 遍智諦現觀(後得智) 究竟現觀 言依五生者四根本禪未至定 是故相見道依五定起 小乘云 加中間禪依六定起相見道也 總說雖然 若別說者 慧解脫人不斷定障無知 故是此人方依根本定 起見道也 問 本業經云 百劫修相好業 与小乘有何別 答 此經意者 為曉小乘故 汝三僧祇中修有漏四波羅蜜故 我云 地前為一僧祇 初地至七地為二僧祇 八地至第十地為三僧祇 滿此三僧祇後 金剛喻定現在前時 方得百劫千劫恒沙劫中 修相好業也

(10) 第三約初迴心教門有其八義 一約地位 謂乾慧地等十地 第十地中即成仏 所以同十地成仏者 為仏下同因位故作此說

記云 法鏡論云 引小心開發大行 命怖向忘遣解守也 解云 立乾慧等十地

²⁸ 阿僧祇時者 謂大乘小乘二乘不同 小乘以六十劫 為大劫阿僧祇 小乘經此三僧祇得作仏 大乘義從拘梨已去 成一百句名一受 一受已去 名一阿僧祇 此是大數 十數中第一數也 (『孔目章』卷4、阿僧祇品時劫章)。

意 令捨小乘解守 入大乘中故也 問 若爾何故為乾慧地等耶 答 未成空覺解故 不令利為乾慧地 謂空理津液如水 故覺空方得智心增長也 二性地者 由解空故 以此解伏結 解堅不改 故云性地也 三八人地者 由解真似四諦故 四諦中一一諦二人故名八忍為八人地 一一諦中二忍 故欲界苦諦中苦忍 上二界苦諦中苦類忍 余三諦中准之也 八忍者希無間也 此八忍所引八者是解脫也 四見地者 由此八忍故得八地 滿第十六心故見四諦平等理 是故云見地也 五薄地者 從見地起修道智 斷欲界九品修惑中初六品 止後三品 故云薄地 六離欲地者 後三品修惑皆盡故不還欲界 是故云離欲地也 七已弁地者 三界結竟盡故得阿羅漢果 是故云已弁地也 後三地可知也 上來括法鏡論意也 問 乾慧等十地三乘共行十地 何故此章中 初教迴心教中說乾慧十地 五十要問答中 初立六道因果 次明愚法二乘 次明小乘及迴心小乘 次明一乘五位滿心 然立乾慧等十地 最後立直進菩薩十七門次第 答 慧鏡德云 昇建立三乘共行十地之本 當是法標師所述 彼師准位以三反釈 謂一釈三乘別教十地 二會別教十地入通教位中 三會通教十地入通宗位中 若依初位者 外凡終性空鄰位中說乾慧地（此五停心觀可作） 性地者 謂總想念處別想念處 及與善四根合此五方便位 為性地也 此五方便中總別 二念處中同觀性空 後四善根中弁觀法空 故合總別二念處為一也 八人地者 立於苦忍位也 見地者 立於須陀洹見道位也 薄地者 立於斯陀含位也 離欲地者 立於阿那含位也 已弁地者 立阿羅漢位 此七地者 屬聲聞乘中 辟支佉地者可知也 菩薩位者 此別教中未說三十心位 唯約十住 唯於四菩薩 謂初住名為新發意住（菩薩？）第二住至第六住 名為久行道地 第七住至第九住 名為阿毘跋致地 第十住名為一生補處位 更等覺金剛心不說 以第十住為終也 此即是丈六色相之實佉成也 第二番者 別教之佉即是覆跡之佉 故退在通教十信 令入十信也 二乘五果者 安十信前 令入十信位中也 問 若爾何故二乘五果不安十住 雖（還？）在十信初心 仁王經云 習種初心既出過二乘 故知不安十住也 五方便中所說性地乾慧地並退安於信前凡位中會 如是別教十地而為欲令入通教故立三乘共行十地 既是通教 方得知佉道長遠 更還三賢十地修 方得成佉是故通教十信即有五品弟子 謂聲聞四果辟支佉果為五 問 若爾菩薩四位云何准 答 習種為新發意菩薩 性種道種為久行道 初地已上並阿毘跋致 等覺是一生補處 妙覺是菩薩也 問 以通教會別教 會別教而假別教位准通教中

如是直自通教說三乘共行十地云何 答 會二乘五果入於通教十信位中 名為乾慧地 三賢位是性地 八（入？）初地中近方便名為八忍地 初地名為見地 二地是斯陀含名為薄地 三四二地名為離欲地 五地與諦觀相應 故名為阿羅漢已弁地 六地是因緣觀 故名為辟支佉地 至等覺名為菩薩地 妙覺名為佉地 第三番者 斷通教障染盡所得佉果 還退 安於通宗十信中也 通教十地退安於通宗十住位五品弟子 謂須陀洹有向果 故如次准於初二住也 乃至第五品弟子名辟支佉 此亦有向果 故准於第九第十二住中 問 若爾何故其佉果立於通宗十信滿心中 通教十地為十住五品弟子 答 約實五品弟子及與佉不別相統 唯依通教為至於其教佉果位 而退安信滿心 故實佉退時竟而退其性 為五品弟子立同 是故此人實退信滿之佉 轉名全修十信行時為聲聞 又為十住菩薩細可思也 問 若爾何故退通教佉立信滿中 唯被通宗教令修十住行 更不令修通宗十信 答 其乘教不實說 通宗方得為實時有於其佉果即信通宗 是故其佉果與通宗信一如類 初地中起一乘信時即其初地成就一乘信也 問 何故別教三乘佉更修通教信 答 彼教三十四念有成佉 皆說此事 有實佉信故其人實佉還令修通教信 而莫信此事故無至別教佉果人 更令修大乘信也 問 通宗勝於彼宗更修此行 答 十信中初五是信等五根 增此五根義中立五心 約實其五中具足法体 通教行者 具世間信等五根 一時具足 若未具前五根 直進行者 還十千劫 方得修十信行成就此信心 問 若爾別教三乘具小乘出世五根 故被通教時即信心成就 答 小乘根及大乘根不異 問 爾此五弟子既修十住行時以何義故與聲聞名 答 此人被通宗教修行故 聞音起行聲聞故 約此義為聲聞弟子 若唯約解一真心道理之義者 是十信菩薩也 <問> 既斷障染成佉 何故退安通宗十信初中 答 汝所立佉果 此十信位八相成道所放變化佉 為實佉故退還令修 問 若爾會通宗次第中 作三乘共行形相如何 答 須陀洹人作五方便 即為十信三位 謂大集經云 十信為三品 謂一下品為乾慧 二中品為隨信地 三上品為法行地 謂中上品為性地也 次二住為薄地 謂第三第四二住也 乃至第十住為辟支佉地 若准位者 性種為新發意 道種為久行 初地已上為阿毘跋致也 等覺為一生補處 妙覺為佉地 若約自通宗者 十信為外凡 故乾慧地習種位通二 謂若從頓教而入者 立五品弟子 隱菩薩位道理 以十住為乾慧地 性種道種二位入初地近方便故 為八忍地 初二三地是信忍 故名須陀洹疑為見地 四五六地是順忍 故名斯陀含為薄地 七八九地是無生忍 故名阿那

含為離欲地 第十地是寂滅忍下品 故名阿羅漢為已弁地 等覺為辟支佉地 通名前諸位為菩薩地 名妙覺為佉地 上來括法鏡論師意 儼和上意彼師義有三重教 謂三乘共行十地者 弟子無門教 所以者何 二乘名無入一乘者故 又小乘中唯一釈迦菩薩成佉 自余無成佉者故也 不立共行十地故 凡立共行十地意引一切小乘人為入大乘故 是故問答意同不立共行十地類 故先明小乘及一乘 通始終頓三教之廻心義立初也 始終頓三教直進義合來立次也 今此章意約実雖通終教 而約初廻心説乾慧等十地 頓教有三乘共行十地 而不明別位次第 故不用三乘共十地 問 若爾何故疏文頓教復作立乾慧等十地之所以而云此十地是一乘所用是三乘所入耶 是即一乘亦立共行十地耶 答 同教一乘約智故 同教一乘所用 約別教直機故 小乘人無一乘故 不立共行十地 同教一乘所用 引下教中立共行十地之機者 皆是一乘所令 故約此義有共行十地 可思之也 又法標師依佉陀三藏為師 此三藏所立通宗大乘明如來藏真心道理為極 故此中皆撰楞伽仁王華嚴 以別教三乘六識為軌則 修成佉廻入通教 通教以妄識為軌則 修成佉依通宗如來藏真心依位地 更令修覺 儼師意者三藏通宗大乘是三乘外華嚴一乘也 下始教撰於通教大乘 依此通教修成行者不信彼一乘 故名自受用身佉 為佉名菩薩 此師義中無諍論 故自受用身佉名佉名菩薩 藏師義中耳(?)極鈍根人不過初地 故名自受用身佉為佉名菩薩 又初地之前菩薩名佉名菩薩 有此諍論 問 佉陀三藏依楞伽經所説 説通大乘通宗大乘 故立通宗等教 何故儼師楞伽經不撰通宗中 答 文依楞伽經而義意趣取華嚴為通宗 此師如是通三藏義也

(11) 七約無分別空理一念即成其佉

記云 廻心教中存依他法 似有相而性是空 約此性空之佉相空理不為真如理

(12) 八約生死最後分段身上即成其佉 此約化身 若約報身分段身後即成其佉

記云 約報身者 滅分段身後成佉也

(13) 約初教已直進位有其七門 一約位 初從十信位等乃至從歡喜地等滿足十地外即成其佉 此由佉境分段身故

記云 此本業經意 謂百劫修相好業所感故 業所感邊名為分段 不如因位有漏業為因 四取為緣所得分段身故

(14) 約大乘終教有其十門 二者從歡喜等初地至盡第九地於第十地中即成其

佉 如梵網經所説者是 此為對聲聞現凡身上得於果証 故作此説 此當變化佉成非當実成

記云 上卷梵經中云 第十体性入佉境界地 依此文故知第十地中成佉也

(15) 三者是約位 從初歡喜地至第三地是世間相同三界 第四地已去第七地相同無流 於世間身中得彼三乘無流德名為出世

記云 約所依身同分段故是世間 而第四地初得出世德故約此德為出世也

(16) 第八此至第十地名出出世 即得成佉

記云 是所依身同成變易故

(17) 第八地成法身 第九地成應身 第十地成化身 此為於十地中別地相 故作是説

記云 約十地論起信論意釈 謂起信論云 依色自在故成十身相作義 十地論云 三世間自在故得十自在 約此位故此位初成佉也 如是第八地中証無生忍故成法身也 第九地中四十九無碍弁才應機説法故成應身也 第十地中雲雨法説故成化身也

(18) 九約生死 滅七種生死後即是其佉

記云 謂分段三有變易四生死 故云七種生死 約此義故相德云 七種苦諦也 故梁論云 三種集諦謂皮肉心 七種苦諦謂三界分段為三 變易有四 故有七種 宝性論云 變易有四 一緣相 二因相 三生相 四壞相 佉性論云 一方便 二因緣 三有有 四無有 無上依經云 三界中有四難 一煩惱難 二業難 三生報難 四過失難 無明住地緣起因緣生死如業難 無明住地緣起有有生死如生報難 無明住地緣起無有生死如過失難 解云 依勝鬘經五住種子名五住地 依五住地起於現行名五住起 依無明住地種子緣起現行法執無明 是變易生死方便名方便生死 故佉性論云 方便生死者是無明住地能生新無流業 譬如無明生行二因緣者 依無明住地緣起無流業 是變易生死親資助[因緣生死 此前二生死非正變易以與變易為方便及因緣亦名生死 如三界中惑業是分段方便因緣 亦名分段生死 故梁撰論云 苦集通名生死 三有有者依無流業] 是業名為因緣生死 此前二生死非正變易以與變易為方便及因緣亦名生死 如三界中惑業 是分段生死 故梁論云 苦集通名生死 三有有者 依無流業 資有流業 所引變易生死 名有有生死 故佉性論云 有有生死者 是無明住地為方便 無流業為因三種聖人意所生身 譬如四取為緣有流業為因三界內生身 四無有者 是變易

生死最後身 故名無有 故仏性論云 無有生死者是三種聖人意生身最後身為緣 是不可思惟退墮 譬如生為緣死等為過失 問 何者是三種聖人 答 勝鬘經云 無明為緣無流業因生阿羅漢辟支仏大力菩薩三種意生身 在地上故 楞伽經第五卷云 有三種意生身 一者三昧樂意生身 謂第三第四第五地 二者如實知諸法相意生身 謂於第八 三者種類無作行意生身 諸師釈不同 一師云 約三學別地 三地是定 若約六度五地是定 故云三四五名三昧樂受意生身 第六地般[槃]若現前 故六七八地名如實覺知諸行智意生身 而言第八者舉其終也 九地已上名種類無作行意生身 第二師云 第一略初二地 故言三四五 第二亦略初二 故云第八地 理實而言 第一通前五地 第二通六七八三地 第三通九十二地 第三師云 次第二於第八地 則知第一七地已還而唯云三四五者 此中略先後也 以實而言 第一通前七地 第二唯第八地 第三九十二地 又四卷楞伽云 第一名三昧樂受樂生身 今依仏性論 真諦師釈勝鬘經 三種意生身者是三乘種性聖人 入初地已上受意生身 故名三種 非是楞伽經中三昧樂等三種意生身也 故仏地論云 有有生死者是三種聖人意所<生>身 無有生死者是三種聖人意所生最後身依生 梁論八地已上是有有生死 金剛菩薩是無有生死 此二生死既仏性論皆言三種聖人 故知三乘種姓至八地已上受有有生死 從本種姓為名 名羅漢辟支大力菩薩 故楞伽經第七卷云 大慧 聲聞辟支仏於第八地菩薩中 樂着寂滅三昧樂門醉 故不能善知唯息(自心?)見 隨(墮?)自相同相熏習障礙 故隨(墮?)人無我見過 故以分別心名為涅槃 而不能知諸法寂滅 大慧菩薩白仏言 世尊說聲聞辟支仏 入第八地寂滅樂門 如來後(復?)說聲聞辟支仏不知但是自心分別 後(復?)說 聲聞得人無我而不得法無我空 若如是說 聲聞辟支仏尚未能証初地之法 何況八地寂滅樂門 仏告大慧 聲聞有二 言入八地寂滅門者 此是先修菩薩行者 隨(墮?)聲聞地 還依本心修菩薩行同入八地寂滅門 非增上慢寂滅聲聞 以彼不能入菩薩行 未曾覺知三界唯心未曾修行菩薩諸法 未曾修行諸波羅蜜十地之行 是故決定寂滅聲聞不能証彼菩薩所行寂滅樂門 問 何故得生死名 答 通名變易生死者轉變改易 若生若死 並是就相為名 別名方便因緣 此二約用 有有無有對後為名 故仏性論云 有有生死如上流[般]阿那含人 於第二生中般涅槃者余有一生故 故名有有 無有生死是變易生死最後身 故復更無生死 故名無有也 問 約位判云何 答 若約頓悟八地已上受變易生 由此已上煩惱不起無容更受分段生故 若漸悟者七

地已還亦受變易 若約四種揔通而言位位皆有 若揔位別唯依梁論 二十二無明感十一僂報中 初八無月(明?)感四僂重 是方便生死 故知方便在前四地 次六無明感三僂重 是因緣生死 故知因緣在五六七地 次六無明感三僂重 是有有生死 故知有有在八九十地 次二無明感一僂重 是無有生死 故知無有是金剛位 若是方便及因緣并有有生死自地起自地斷 若無有生死障仏地金剛斷 所以爾者十地是學位故自地障自地斷 仏地無學位故仏地障金剛斷 問 若如前說方便因緣乃是變易 方便因緣非正生死 何故皆言所感僂重報是變易耶 答 若是漸悟方便因緣位中即是分段名僂重報 若望後說初之四地相同凡夫無明增強遠與八地已上變易生死為其方便 五六七地相同二乘及初修菩薩 修無流道亦與八地已上所感變易為資助因也 若後二種正變易體 慧遠師云 說二生死各有六重 所言分段六重者 惡道三重與善道三重也 問 惡道三重如何 答 一凡夫所受分段 惡業為因 四住地為緣 二十信所受分段 惡業為因 四住地為緣 悲願為隨助 三種性已上乃至初地所受分段 惡業為因 悲願為正緣 四住地為隨助 約此三重為惡道分段 問 善道三重分段如何 答 一凡夫二乘大乘十信所受分段 善業為因 四住地為緣 二種性解行所受分段 善業為因 四住地為正緣 悲願為隨助 三地上所受分段 善業為因 悲願為正緣 四住地為隨助 約此三重為善道分段 所言變易生死六重者 事識三重及妄識三重 問 事識三重變易如何 答 一阿羅漢辟支仏所受變易 事識中生空觀為因 無明住地為緣 二種性解行所受變易 事識中法空觀為正因 無明住地為緣 三地上所受變易 事識中非有無息相之解為正因 無明住地為緣 約此三重為事識中 三重變易生死 <問 妄識中三重變易>如何 答 一地前所受變易 妄識中 一切妄想依真觀以為因 無明住地以為緣 三八地已上所受變易 妄識中 唯真無安息想觀以為正因 無明住地為緣 約此三重為妄識中三重變易生死

(19) 十者依大乘同性經有三種十地 聲聞十地緣覺十地仏十地 為揔引小乘同於大乘終教之義故作此說 其十地名等具如疏說 又有差別 十地相広如梁論修時章釈

記云 彼經亦名一切仏行入智毘盧遮那藏說經有二卷中引初卷也 修時章者此引彼論第十一卷修時章第五 如彼論云 若見真如即入清淨意行地 從初地至十地同得此名 清淨意行人自有四種 初一從道立名謂清淨意行 後三從別立名 謂有相行無相行無功用行 此清淨意人從第六地以還說名有相行 乃至

第七地は無相行有功用 乃至若人入八地有無相行無功用未成就 若八地円満於八地無相行無功用已成 於九地十地無相行無功用未成満 第三阿僧祇劫此無相無功用乃成 譬如須陀疑斯陀含阿那含三位製立為五人 若三位云何製立為五人 由位差別故成五人 從初方便至須陀疑為第一人 家家為第二人 斯陀含為第三人 一種子為第四人 阿那含為第五人 菩薩位爾 初地為第一位 從二地至七地為第二位 八地至十地為第三位 亦得製立為五人 從方便至初地為第一人 從二地至四地為第二人 五地至六地為第三人 七地為第四人 八地至十地為第五人 解云 此約声聞乘果 釈十地者顯他人釈十地中別 故此章引此文顯三乘十地差別不同 問 若爾与此十地准釈意云何 答 惠鏡德云 從方便至須陀疑為第一人 為初地人者 是同見道類故 家家者 此從人死生於天中 還亦至人中 如從家至家故云家家 第二地中修惑時以無流智而修行 至四地中還得彼無流智 故約此義准家家也 五地六地於無相中最勝故有相行薄唯薄地人也 第七地中離有相行 唯有功用位故唯受半生准也 八地已上離有功用 故准已離欲人可知也

(20) 第五約一乘義者 十信終心乃至十後位十行十廻向十地皆成仏 又在第十地亦別成仏 如法寶周羅善知識中説 何以故 一乘之義為引三及小乘等 同於下位及下身中得成仏 又八地已上即成仏 如於此位成無碍仏一切身 故此揔別教言

記云 經四十九云 其宅廣大十重八門乃至云 見第九重補處菩薩充滿其中 見第十重一切如來充滿其中

(21) 若揔同教説即揔前四乘所明道理 一切皆是一乘之義 文雖是同而義皆別 如此等法差別相者為護十地故隨方便門作種種説 今(令?)諸衆生於十地中離增上慢

記云 三乘人定逕十地方得成仏 故為增上慢 而為欲令離此增上慢故位位即得成

(22) 又依六相總別義 即是一乘隨相別布義即是三乘 此約教分説 其一乘十地之法 盡其三世已通究竟 此揔証説

記云 於此十地用六相緣起陀羅尼法者 即是無碍自在十地 故為一乘也

2. 著者未詳『華嚴十玄義私記』への引用

『孔目章』卷一「天王讚仏説偈初首顯教分齊義」(T45、537a-b)

依教有五位差別不同 一依小乘 有名之教詮有名之義 此在分別遍計位中 二有名之教詮有名之義 有名之教詮無名之義 此當迴心初教位中義當即名義即空教也 三有名之教目有名之義 有名之教目無名之義 無名之教目無名之義 此當熟教位中即性実成有之義 非是所謂有也 四無名之教顯無名之義 義當在頓教位中 一実三昧説也 五有名之教説有名之義 無名之教顯無名之義 當在円教位中見聞処説 有名之教顯有名之義 有名之教顯無名之義 無名之教顯無名之義 此約円教処説 為撰義無尽故

(『華嚴十玄義私記』卷上の中)

(23) 問 約円教有二法者何

答 解見聞処言(?) 解円教当体

問 約此二法分教方何

答 約見聞処有名之教説有名義・無名義 無名之教顯無名義 約同教処有名教顯有名義 有名教顯無名義 無名之教顯無名義

問 其見聞処云 円教当体所知何云此云云不同 有云見聞処者約円中別円教処者約円中同云 新羅記云 見聞処者約円中同 円教処者約同教当体云云 今云就五教意言 見聞処者 約別三生中見聞処 円教処者 通解往(行?)生証果海生

問 且就第二伝其意何

答 寄終教三乘顯一乘道理 云見聞処 惣下四教為円教自体故 云円教為(当?)体意也

問 何寄終教三乘顯一乘道理 云見聞処云云

<答> 終教三乘機令同一乘故 彼終教三乘令見聞一乘故 云見聞処 下四教三乘小乘等 為円教自体 顯重重無尽道理 故云同教当体也 今云 新羅記所説為正 何者准孔文故

問 何准孔目文

答 孔目上文説方便乘処云(同教一乘也) 上件撰下諸教 頓属其上分本教

義 漸從其末義 通一乘三乘小乘等云云²⁹ 說下十世處云 仍此一乘教局見聞為始云云³⁰

問 何約見聞處有名教詮有名義 有名教詮無名義 無名教詮無名義耶 約門教所亦爾也

答 約見聞處寄終教三乘顯教義 故任終教三乘惣挙 約門教處諸教重重無尽 故挙諸教教義也

(24) 問 何孔目師依一天王說 說偈初首向等文 說此五教別

答 第四禪地大自在天王 別十天王 於中第一妙淡海一天王偈讚中云 如來音声無泯碍 堪受化者靡不聞等云云 依此文說五教別也

問 何依此文說五教差別

答 既能說如來音声無泯碍 能聞堪受化衆生 隨其分齊小乘為乘 問(聞?)說小乘教 始教機人為乘 聞說即空道理 門教人為我(乘?)問(聞?)說重重無尽道理 故以此文說五教分齊也

問 青丘記云 此經第一卷中初善光海大自在天王讚偈頌云 無尽平等妙法界 悉皆滿如來身云云 依此文華嚴<和尚>顯五教別爾 物(?)何不此文 引余文為証

答 顯上文說教義文 故引為証 今引此記文為証無妨 但孔目師恣(恐?)不引上文何者 云初首故也

問 此文取何當為証云云

(答) 下文云 諸仏法王出世文能知無上善巧法云云 又別顯經云 能知無上正法教云云 意如來隨機 為小乘巧說証彼之教 乃至為同教機 巧說証彼之教故云能知善巧法言也

(25) 問 楞伽經說四種言說相 配今此五教教義何

答 青丘記相配說 所以彼說云 如楞伽經第二与十楞伽第三云 仏言大患有四種言說分別 所為相言說 夢言說 計着過惡言說 無始妄相言說 大患相言說者 所謂執着自分別色相生 夢言說者 謂前所經境界 覺已憶念依不実境

²⁹ 「於方便之處 示一乘名 令進入者易得解故 作如是說 若橫依方便進趣法門 即有二義 通說一乘 一由依究竟一乘教成 何以故 從一乘流故 又為一乘教所目故 二与彼究竟門一乘 為方便故說一乘 非即門通自在義也 余義準可知 上件法門 攝下諸教 頓屬其上分本教義 漸從其末義 通一乘三乘小乘 何以故 為彼門教所目」(『孔目章』 卷1 <盧舍那仏品中雲集文末普賢文中立一乘三乘義章> T45 538b).

³⁰ 「仍此一乘門教 局見聞為始」(『孔目章』 卷1 <說分文内淨土因緣文初立十世界章> T45 539a).

生 計着過惡言說者 謂境界念怨讐先所作果生 無始妄相言說者 以無始戲論妄執習氣生云云 即釈云 此言有名教者 當於相言說也 有名教詮有名義 有名教詮無名義 當於夢言說也 無始妄相言說 合上三言說云云 計着過惡言說外道言說故不相当也

3. 増春『華嚴一乘義私記』における引用 (大正72, 32c)

(26) 問 三乘与一乘 權實既別 何総三乘名一乘乎

答 文云 以隨本宗定故云云 意三乘一乘本宗所流所目方便云事定故 総三乘名一乘云也

問 総三乘名一乘者 名同教一乘 名別教一乘乎

答 名同教一乘 不名別教一乘 所以章云是同非別云云 又孔目第一云 非即門通義云云³¹

問 何故不名別教乎

答 章云主伴不具足故云云

問 主伴不具故名同教一乘 不名別教一乘者 同教中不說無尽義乎

答 爾也 不說

問 爾何十重唯識章云 帝網無碍故 說唯識 総具十重 約同教說乎 既帝網無碍唯識約同教說云云 何今云同教中不說無尽義

答 新羅珍嵩記云 同字謬也 可作門字云云 意可云約門教說 不可云約同教說云也

³¹ 「若橫依方便進趣法門 即有二義 通說一乘 一由依究竟一乘教成 何以故 從一乘流故 又為一乘教所目故 二与彼究竟門一乘 為方便故說一乘 非即門通自在義也」(『孔目章』 卷一 <盧舍那仏品中雲集文末普賢文中立一乘三乘義章> T45 538b).